# ならまち今確かな時を見る

# －町家の中庭－

時代と共に変わりゆく奈良町の中で
現在、生活にとけこみいきづく町家。
今、その魅力を記録する。

「うなぎのねどこ」といわれる間口が狭く、奥行きの深い敷地に建つ町家にとって「中庭」は欠かすことの出来ない大切な空間である。

住まいに光と風をはこび、快適な生活環境を保証する施設として中庭は生まれた。

町衆の生活、文化に育まれ次第に独特の趣を持つ空間に発展し、町家の大きな特徴の一つとなっている。

その成り立ちと、特徴を探り新たな町家を考えていくよすがとしたい。

●なら・町家研究会

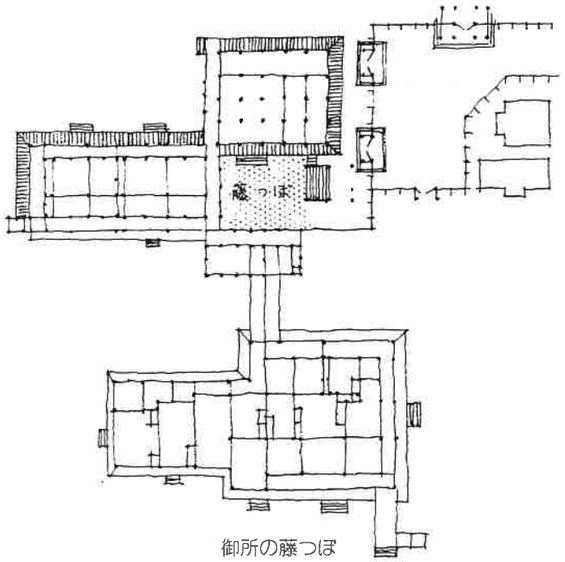
トリエンナーレ奈良 1995

中庭は庭園と言われる大きなものでなく、建物に囲われた小さな庭で、
また「つぼにわ」ともよばれる。

「坪庭」「壺庭」「局庭」などと記される。いずれも「囲う」という意味の「つぼ」に対する当て字である。

# 日本の中庭

## 寝殿造りの壺（平安時代）




御所の藤つぼ

### —— 出来てしまった空間 ——

御所の中庭　　藤壺、萩壺（藤、萩が植えられている庭で現存する。）

源氏物語にも桐壺、藤壺など登場する。

これらは建物と建物の間に、出来てしまった空間ではじめから意図して設けられた空間ではなかった。

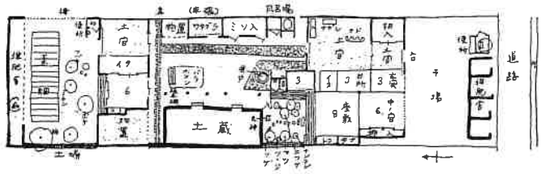
## 町家の中庭（中世末から近世）

### —— 意図して設けられた空間 ——

中世末から近世に成立した町家に設けられた中庭で、おおむね今見る中庭に継承されている。

町の発展にともない、建物を増やしていく。この時「すきまの空間」は、意図的に残され採光、通風に機能する。また中庭に接するところが座敷として整備されていく。

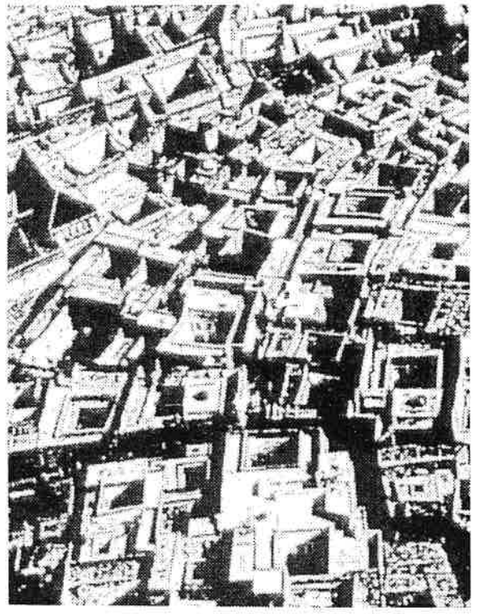
下の平面図は、法蓮町の町家造り農家のプランで座敷に対となった中庭の萌芽がみられる。




法蓮町の町家造り農家



# 他国の中庭



イスラムの都市（モロッコ　マラケシュ市）

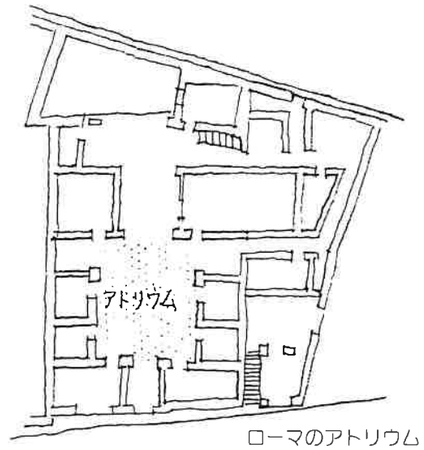
世界各地にそれぞれの中庭がある。

中国では院子、イスラムではパティオ、ローマではアトリウム等呼ばれている。これらに共通しているのは、中庭が部屋から部屋への移動に使う実用性を備えた空間であること。

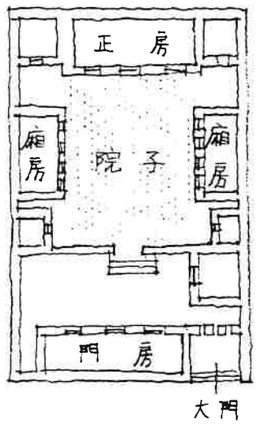
これらでは居室と中庭で履物をかえることはない。

これに対し、日本の中庭は、原則として人が踏み入ることのない空間であり、居室では履物を脱ぐ。

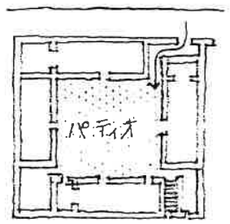
この椅子式と、坐式の生活様式の違いは中庭の質を、おおきく決定する。さらにそれぞれの文化が中庭を多様なものに育てている。



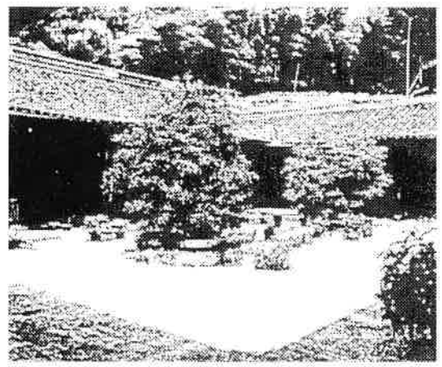

ローマのアトリウム




中国の院子



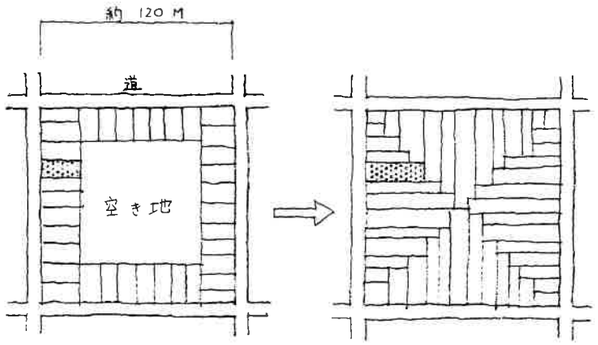

イスラムのパティオ



中国上海近郊の寺院

# 奈良町の地割

古代平城京の条坊制によって規定される。各四辺を表通りとした約120㍍四方の「坪」が基本になる。

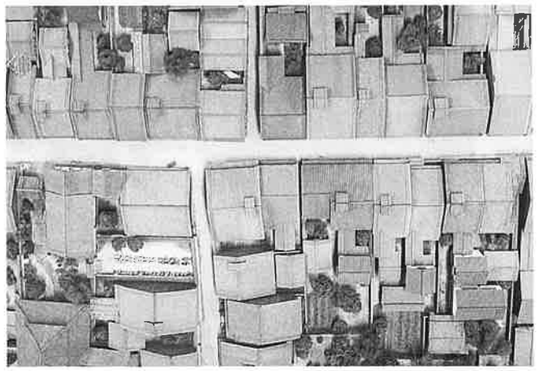



**中世**　表通りに沿って家が建つ。囲われた内部は空き地。

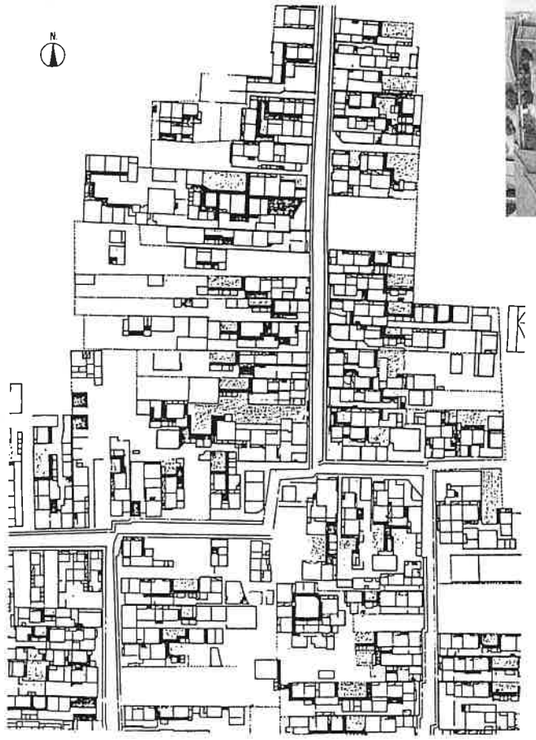
**近世**　表通りから奥へと敷地が広がっていく。

中世には、洛中洛外図に見る京都と同じように、表通りに沿ってのみ住居が存在し、囲われた内部は大きな空閑地であったと思われる。

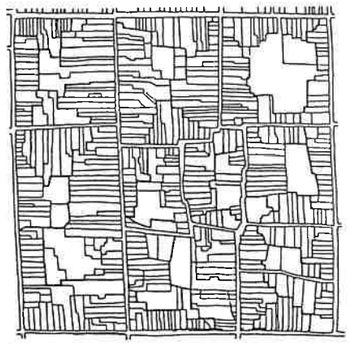
江戸時代の初期から中期にかけて、各敷地は限りある表通りの間口を分かち合い、次第に奥へ奥へと広がっていった。「うなぎのねどこ」の成立である。



奈良町模型写真



奈良町の連続平面図（着色部分は中庭）

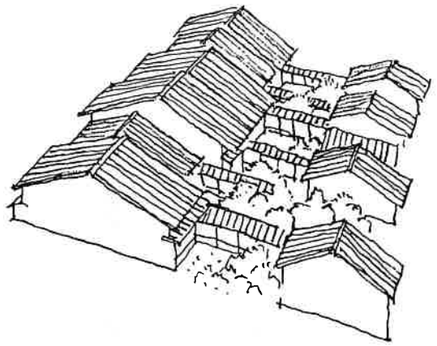


元興寺近辺の敷地割

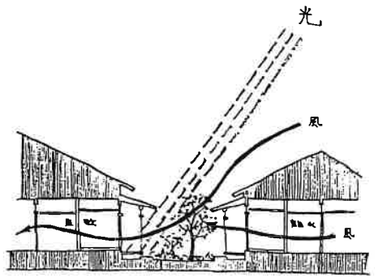


# 奈良町の中庭

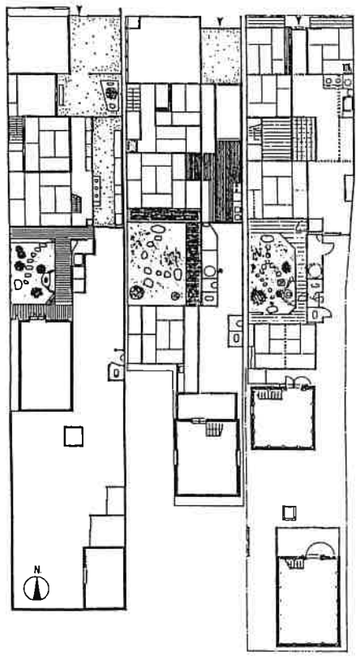
## はたらき



三軒とも中庭は同じ位置に設けられ、また、全て西に寄せられている。
互いの中庭の環境を守りあっている。




細長い町家の中に設けられた中庭は、太陽の恵み、風のささやきをはこび、四季のうつろいを感じさせてくれる。
また、町家に住まう者どうし、互いの環境を守るための気配りされた空間でもある。



町家の平面図（三軒分）

## 茶の湯

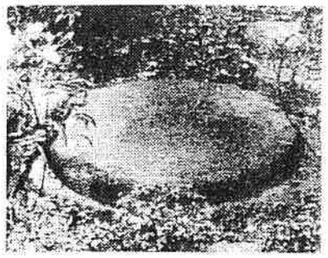
奈良町において、今も、住まいの中に茶室や、あるいは簡単なお茶を楽しむ部屋を持つ町家が残る。茶人村田珠光ゆかりの地奈良は、近世を通じて町人の間で茶の湯が盛んであった。
茶の湯が町家の中庭に与えた影響は大きく、現在のこる中庭のほとんどが、それを示している。本来踏み入ることのない中庭に、飛び石、手水鉢あるいは蹲踞、灯籠を配すること、また約束事のように庭に面する縁の庇や、渡り廊下が数寄屋風に造られることなどがそれにあたる。これらは茶室に通じる通路、露地にしつらえられるものである。
この様な中庭をとくに「露地坪」ともいう。

## 井　戸

町家では生活用水を得る井戸は、台所がある「通り庭」の近くかまたは、風呂場があるその延長線上の奥に設けられる。
奈良町の中庭に井戸をよく見かける。庭のためにわざわざ掘ったものとは思えない。
間口の狭い敷地がその歴史の中で、隣の敷地を吸収し、一つの敷地になる。建物も規模を大きくし、中庭も新たに造られる。以前からあった井戸は埋められることなく、庭のしつらえとしてそこに残る。
奈良町の敷地の変遷をたどる上で興味深い。

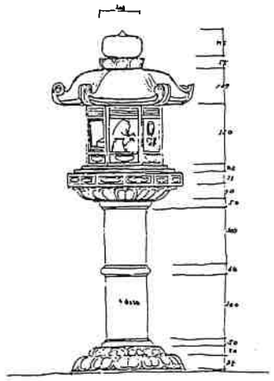
## 礎　石

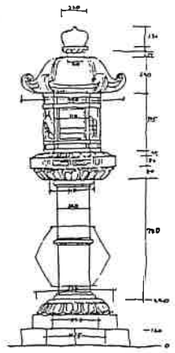
中庭の飛び石、沓脱ぎ石に寺院の礎石をよく見かける。時代や由来は分からないが、元興寺や興福寺の境内地、寺領から発展した奈良町の歴史をしのばせる。



## 灯　籠

近世初頭から社寺に灯籠を奉納することが次第に盛んになる。現在社寺にある灯籠は、圧倒的に近世中期から後期にかけてのものが多い。
奈良町の中庭にある灯籠は、足元を照らす茶の湯の庭、露地におかれる背の低いものでなく、社寺と同じような大きなものが多い。
灯籠を奉納するのには相当の財力がいり、誰でもが出来ることではなかった。それだけに憧れもあり、やがて経済力もつき町家にも、同じような灯籠が流行する。近世後期から近代にかけての時期と思われる。



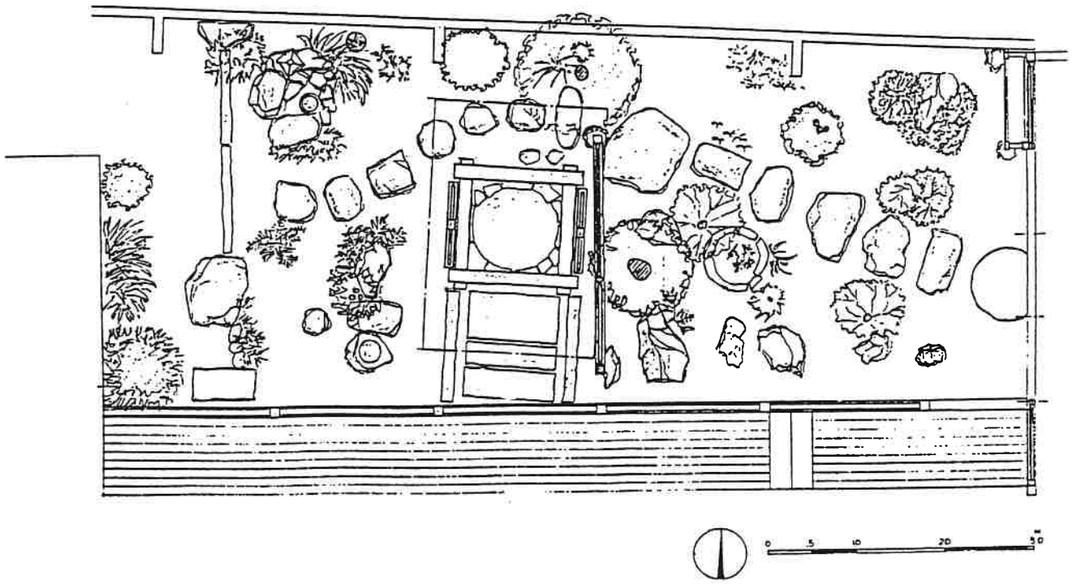




# 中庭の実測図 (1)

元興寺町（F邸）

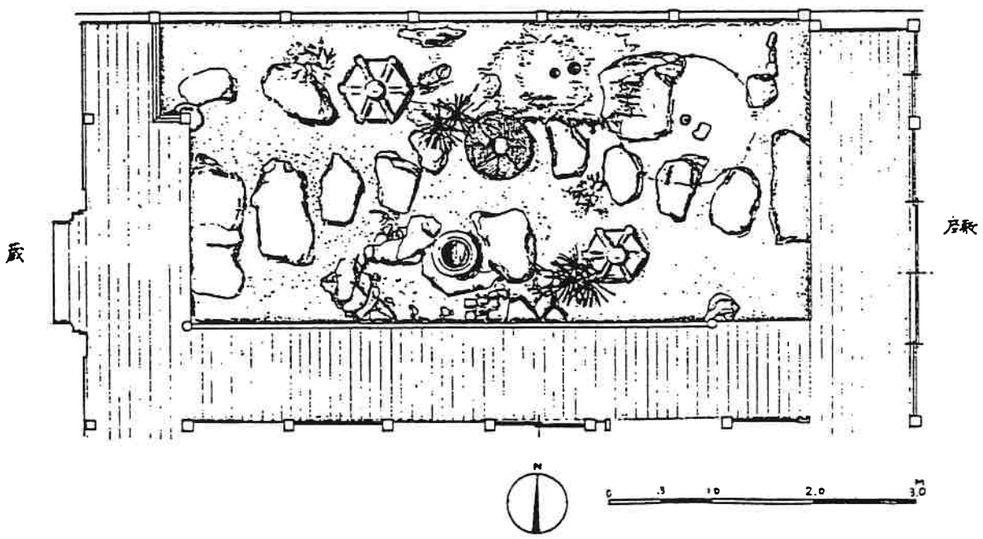
中央に残る大井戸が、特徴を際立たせている。比較的大きな中庭。大井戸には屋形が覆い、庭を前後二つに分けている。前後を貫く飛び石は、豪快で江戸中期（元禄）の建物と良くバランスしている。



# 中庭の実測図 (2)

下御門町（M邸）

永く放置された状態が続き、木々の姿は無造作であるが明治初期の建物と同時に造られた典型的な中庭。中規模な面積の中に、灯籠、手水鉢、飛石がしっかりと組み込まれ、石の使い方は豪快で力強い作風である。

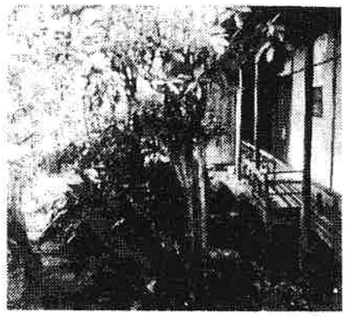


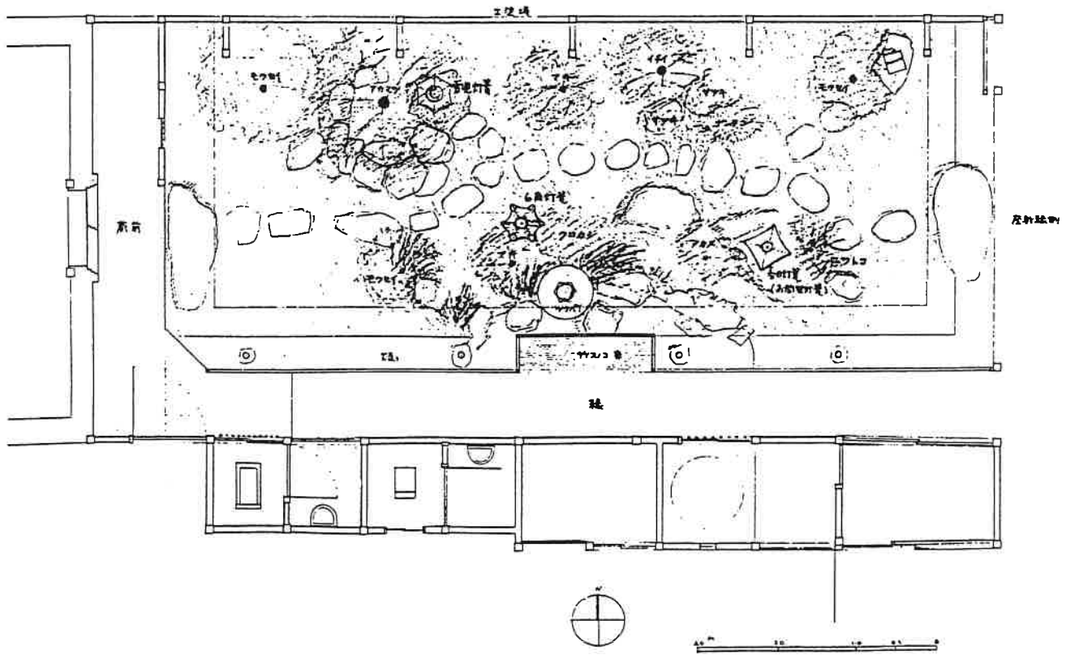



# 中庭の実測図 (3)

井上町（W邸）

数年無住が続き、手入れがなされていないが、明治期の中規模の中庭。雪見灯籠を除く２基の灯籠や、手水鉢は立派で繊細な変化に富む庭を造り出している。

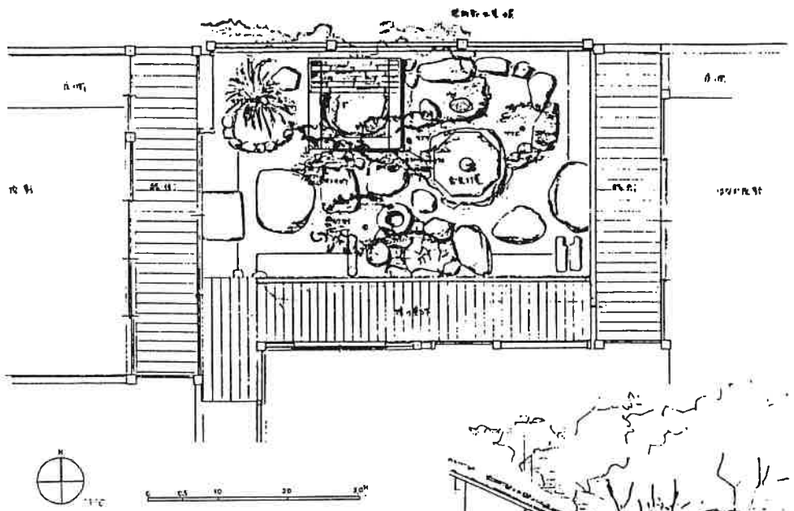


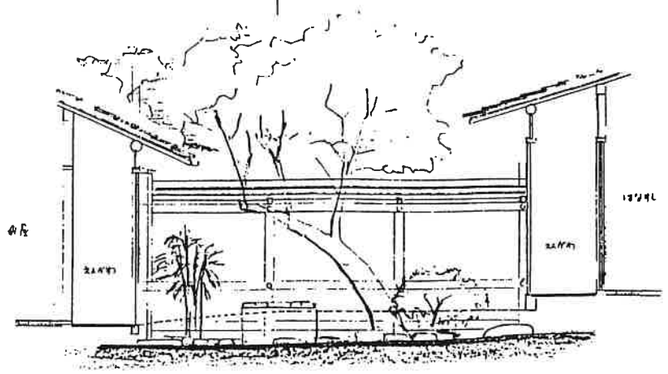


# 中庭の実測図 (4)

鵲町（O邸）

梅の老木が全体を覆い、井戸、雪見灯籠を中心とした小規模な中庭。主座敷と、離れ座敷の双方から鑑賞するようになっており、中を隔てる竹垣が景を二つに分ける。狭い面積で非常に密度の高い庭となっている。



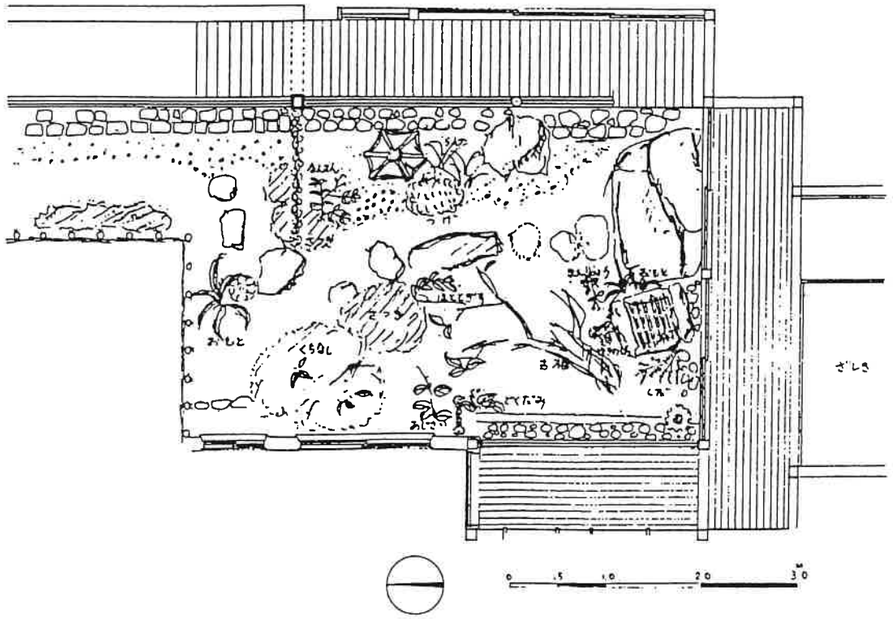




# 中庭の実測図 (5)

西寺林町（N邸）

手入れの行き届いた新しい中庭。もっぱら店の座敷から鑑賞するように造られており、奥行きを感じさせる手法が近代的で、優れている。



## おわりに

●町家のわずかな空間に設けられた「中庭」に、町の成立、発展の歴史、人々の生活、文化の足跡までその一端を垣間見ることが出来た。
我々が今、民家（町家、農家）に魅かれるのは、ただ木材の大きさ、古さにあるのではなく、また土間や通り庭、囲炉裏のある生活に対するノスタルジィだけでもない。そこに重ねられた人々の生活、文化の息づかいを感じとり、更に現在の我々の歴史をあらたに重ねていくことに、あるのではないだろうか。
町が活力を持つとき、中庭もまた輝く。人々が去るとき中庭は眠りに入る。我々が一年間のフィールドワークで見てきた奈良町の中庭はいかがであったろうか。メンバーそれぞれの感想を記して、つぎへのステップとしたい。（明）

●中庭を通じて町全体の栄枯盛衰、時代のながれを感じた。現代の我々には、中庭はまだ博物館的郷愁ではなく、人々の生活と共に生きてきたみじかなものとして、心に焼き付く。急激な人口増加と文明の発達で生活様式は大きく変化した。それが自然破壊の引金なら、自然を無理なく取り入れた町家づくりは、環境に対しても優しい建造物と言うことが出来る。
保存だけではなく物心両面において、その知恵をいかに活用していくかが、課題である。（栄）

●奈良町を都市として捉えていく時、町家の中庭は、近世近代の都市文化として非常に興味あることになります。今回は手がまわりませんでしたが、奥庭等も含めて、造園や草花園芸という形で、緑の文化を育んできたと考えています。これからの都市には、もっと公共的な、あるいは、表（オモテ）に表れる緑の文化も、育まなければならないと感じます。（治）

●一番の印象は、当初の姿が残る家の少なさ。生活と深く係わりを持っているため、世代が変わるごとに、その姿も変えられるのでしょう。
必然性や建築手法によって生まれた空間が、美の空間に変化していくのは庭園にない魅力だと思います。（啓）

●特徴ある奈良の町家における中庭の、重要性を再認識した。
町家を造るにあたって、外部空間の組立や、外部と内部空間との緊密な関わりから必ず中庭は造られてきた。そして次第に定型化される。
単に住まいの機能性を高めまた、眺めるだけに中庭があるのではなく、住まいの中の「ぜいたくな空間」と思う。と同時にその手入れの困難さも感じた。いろいろな可能性を併せ持つ中庭を今、新たに考える時期に来ているのではないだろうか。（龍）

●一つの完成されたスタイルをもつ京都の中庭に比べ、奈良町のそれは、奥深い敷地形態・奈良町の生活習慣からか、人々の生活の中で温められてきた素朴な印象を受けた。これからの奈良町の成長を考える上で、先人の歴史に学ぶことと共に、中庭は、現在の私たちの思いを写し出していける一つの素材であると思われる。（浩）

●現在も町家を「みせ」として使っている家の中庭は、生活と密着し生き生きとしていた。中庭の魅力、重要性を感じることが出来た。一方日常生活されていない町家も多くその中庭は活気がなかった。この中庭がふたたび、生き生きとよみがえることを願って。（和）

### 参考資料


奈良市史　建築編　奈良市史編集審議会　昭和51年
奈良町 ― 都市計画道路杉ケ町高畑線の工事に伴う町並調査 ―　奈良市町並建造物群専門調査会　昭和57年
保全的刷新 ― 奈良三新屋町の調査 ―　歴史環境をめぐる研究会　昭和54年



**なら・町家研究会　会員**
秩父治征　アックス・ラボー級建築士事務所
徳本栄三　E I 建築設計事務所
藤岡龍介　藤岡建築研究室
増田明彦　増田設計室
吉川和彦　吉川デザイン工房

**協力会員**
北村浩康　藤岡建築研究室
野理啓子　アックス・ラボー級建築士事務所

**事務局**
〒630　奈良市四条大路１丁目３－43
藤岡建築研究室　TEL 0742－34－8531

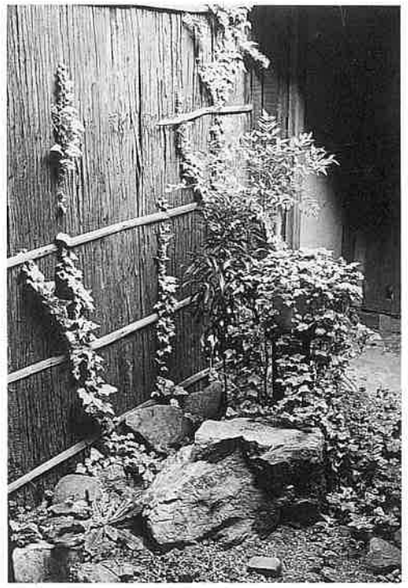


協賛　財団法人世界博覧会協会




# ならまち今確かな時を見る
# －町家の中庭－

時代と共に変わりゆく奈良町の中で
現在、生活にとけこみいきづく町家。
今、その魅力を記録する。



「うなぎのねどこ」といわれる間口が狭く、奥行きの深い敷地に建つ町家にとって「中庭」は欠かすことの出来ない大切な空間である。
住まいに光と風をはこび、快適な生活環境を保証する施設として中庭は生まれた。
町衆の生活、文化に育まれ次第に独特の趣を持つ空間に発展し、町家の大きな特徴の一つとなっている。
その成り立ちと、特徴を探り新たな町家を考えていくよすがとしたい。

●なら・町家研究会
トリエンナーレ奈良 1995